

令和7年度〔自己評価報告書〕

|      |            |       |
|------|------------|-------|
| 学校番号 | 学校名        | 校長名   |
| 45   | 川崎市立上丸子小学校 | 横山 里恵 |

|                                 |  |
|---------------------------------|--|
| 学校教育目標                          | 今年度の重点目標   |
| 「3つの心を育もう」<br>学びの心 たくましい心 やさしい心 | <b>受容と共感で、笑顔あふれる学校づくり</b><br>・主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善および業務改善を図る<br>・望ましい集団活動における自主的・自治的な活動を推進する<br>・誰もが願いをもち、互いのちがいを豊かさにして、自分の言葉を大切にしながら折り合う経験を積み重ねる |

| 評価項目  | 具体的な取組  | 成果と課題  | 具体的な改善策   |
|---|---|--|---|
| 1<br>確かな学力の向上   | 地域の特色を生かした体験活動を教育活動に位置付け、社会に開かれた教育課程を編成する。<br>「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて「能動的に学ぶ」授業改善を図る。 | ○校内研究やプロジェクトを通して児童の実態に合わせた単元開発ができた。<br>○社会に開かれた教育課程の実践を意識し、上小サポーター(保護者)や地域人材による協力を得て、授業を行うことができた。<br>○地域イベント(びっくり市復活)に6年生が参画し、地域とのつながりから探究的な学びを充実させることができた。自己有用感や成長感につながった。<br>○校内研究では、ちがいを豊かさ捉え、認め合い自分たちのよりよい未来を創造しようとする力を育む授業改善について考えることができた。授業を見合い、主体的に授業改善に取り組むことができた。<br>○学年が上がるほど全体での発言発表が減ると児童自身が感じている。   | ○多摩川学習とキャリア教育に取り組んでいる内容を学年間で共有し互いに高め合う。<br>○「まなんでたまらんど」と「地域学習」と「わたしたちのかみまもるこ」をリンクさせながら、カリキュラムの見直しを行う。地域とつながる上丸子小プランとし、子どもの社会参画と自己実現の力を教科の特性を生かしながら高める。<br>○校内研究が日常の授業改善に結びつけられるような組織的な取組を行う。「豊かな言葉の担い手」となるように、学校図書館を有効活用し、「電子図書」と「書籍」の両方で読書率を高める。<br>○各教科・領域等で「探究的な学び」を追究し、自己や他者の学びを認め合い高め合うための「表現活動」を意識した授業展開を行う。    |
| 2   | 基本的・効果的な指導や指導方法および評価について共通理解し、児童の学び、力を育む。   | ICTの効果的な活用を図るとともに、学習習慣の確立と誰もが参加できる分かりやすい授業づくりに取り組む。<br>「話す・聴く」の系統的な育成を目指す観点で共有し、授業や生活の様々な活動において子どもの姿から価値づけしていく。  | ○話を聞く姿勢やノートづくり、GIGA端末のルール等の学習習慣づくりの指導について校務分掌の担当を中心に児童の振り返りも活かしながら定着を図る。<br>○学びに不安を感じている子への支援を環境整備と指導体制を工夫する。<br>○家庭学習の目的について児童・保護者・教員がすり合わせながら認識し、「自ら学ぶ力」の育成を家庭と共に進める。   |
| 3   | 自主・自律の育成と自己有用感の醸成を図る。   | 「違いを認め合い、みんなと共に生きていく力」「よりよい集団や社会をつくらうとする力」「なりたいたい自分に向けてがんばる力」を育成する基盤として、学級会、学級活動を意図的・計画的に進め、「自分たちの学校づくり」への社会参画の力を育む  | ○学校教育目標を踏まえて全クラスが学級目標を設定した。行事には児童会活動(プロジェクト)を中心とした取組を行い、主体的にかかわること達成感をもち、自己有用感が高まった。<br>○児童会スロガ「にこもりこっ」に基づき、一人一人が楽しい学校づくりを目指したよりよい集団活動に参加できるようになった。   |
| 4   | 特別活動を中心として自主的・自治的な活動を保障する。  | 児童の創意・発意に基づいた係活動、当番活動、委員会活動、クラブ活動、たてわり活動等、特別活動を中心として、自主的・自治的な活動への願いや考えをもたせ、話し合い活動・実行・ふりかえりの一連の活動から児童の主体性を育む。   | ○発達段階に合わせてどの学級も学級会に計画的に取り組んだ。学級・学校づくりにかかわる意識を高め、「上小まつり委員会」をはじめ年間通じて望ましい集団活動のなかでよりよい人間関係の形成も図ることができた。<br>○委員会・クラブの立ち上げ会議を充実できたことから、児童が学校生活に願いをもち、意思決定と合意形成を図りながら集団活動を展開するようになった。<br>○担当を中心に、教職員全体の特別活動への理解が深まり、児童の姿から成果と課題を明確にして児童の主体性を重視した指導に努める意識が高まった。  |
| 5   | 心と体の健康・安全への意識を高めるために健康・安全教育の推進を図る。  | 健康・安全(食事、体力、防災意識)と日常生活を結び付け、自分の成長やみんなの安全のために自発的、自主的に実行しようとする自己指導能力を育成する。   | ○栄養職員や養護教諭とのT.T.を行い、健康・安全の学習活動を充実させることができた。<br>○水害での垂直避難、不審者等の防犯訓練を行った。防災教育では、地域住民や区危機管理担当と連携した学習を行い、より自発性として考える姿勢を育んだ。   |
| 6   | 学年を中心に学校全体での相談体制を確立し、一人一人の児童の居場所づくりに努める。  | ダブルCoを中心とした組織的なつながりを構築し、報告・相談・連絡の徹底と、個々の児童の状況に応じた対応に努め、迅速にチームで対応する体制をつくる。  | ○支援教育コーディネーターが学年と連携し、迅速な情報収集や初動対応で組織的な取組を徹底することができた。<br>○不登校にかかわる対応では、学校が保護者と共に個々に応じた対策を進めているが、働きかけの時期や場・人材の提供には課題が残った。<br>○いじめや体罰の研修を年度途中に実施し、学んだことを生かして対応した。  |
| 7   | いじめの未然防止に向けて効果測定、共生・共育、学校生活アンケート等の有効活用を図る。  | 効果測定の見取りや話し合い、共生・共育プログラムの実施が定着している。<br>○学校生活アンケートの活用、人権週間での授業公開を行った。<br>○全校・学年の集会の場を活かし、よりよい生活づくりについて輪番で教員が講話を行った。   | ○効果測定、共生・共育プログラムに加え、SOS出し方・受け取り方教育についても研修し、より効果的に児童指導に生かす。<br>○生活アンケート実施後の回答確認から情報共有までを迅速に進め、個々の子どもの困り感の把握と支援に努める。  |
| 8   | 道徳を中心とした人権尊重教育を通して、道徳の実践力を高める。  | 保護者、地域の人・もの・こと等を活用し、道徳の授業を充実させる。また、道徳で学んだことを学校生活で発揮することに努め、相手意識をもった道徳の実践力の向上を図る。   | ○道徳科の授業は、学年が児童の実態や発達段階に合わせ、最適な時期や指導事項を吟味し計画的に取り組むことができた。<br>○外部人材と連携し、人権尊重教室(4年)や性の多様性教室(5年)を実施し、ちがいを豊かさにする見方・考え方への理解が深まった。   |
| 9   | 外部講師や地域の人材等を活用して、地域に求められる教育を工夫する。   | 地域の特色を生かしたカリキュラムを生活科・総合的な学習の時間を中心に構築し、地域の人材や外部講師との積極的な連携を図り、教育活動に取り組む。   | ○道徳科の研究授業発表を行い、授業力向上を校内全体で図る。通して発信し、家庭の理解と協力を求める。<br>○学校公開日や人権週間を活用して、保護者の方にさらに伝わる実践を行い、道徳科の特性と重要性への理解を図る。  |
| 10  | 外部講師や地域の人材等を活用して、地域に求められる教育を工夫する。   | 授業参観や、学校だより、学年だよりで児童の学習や生活の様子を伝えた。<br>○運動会では、育てたい資質・能力の観点を明らかにしながら、全校での取り組みを参観いただいた。子ども達があてをもち、共に高め合いながら取り組む一人一人の姿を通して、学校への理解が深まった。<br>○学校運営協議会は5回実施し、学校評価の内容を一纏めに検討してきた。学校の取組がわかりやすくなったとの評価をいただいた。<br>○協議会委員の方々の協力で、昨年度に続き地域学習が一層充実。子どもたち自身の願いや考えから学びが展開し、成果発表の場も適宜設け、地域への愛着が増した。   | ○学校だよりや保護者懇談会、学校運営協議会等、折に触れより多くの保護者や地域にゆけ、学校教育活動が向かっていくように努める。<br>○様々な教科領域で地域や外部人材を活用し社会に開かれた教育課程づくりを目指す。<br>○今後も学校運営協議会の方々や対話を進め、よりよい学校評価の在り方や協働できる教育活動を検討し推進していく。<br>○5年生の防災教育の発展として、地域行事の「防災キャンプ」の実現に学校施設を提供する。<br>○「かわさき探究2.0」を推進し、子ども自身が地域とつながりできることを考えながら、身近な大人たちの相互性を高め、子ども達の自己実現や社会参画を意識した探究活動を図ることができるようになる。 |
| 学校関係者の評価  |   | 学校運営のまとめ   |   |
| ○学校評価アンケートは、教職員をはじめ保護者も地域それぞれが主体性をもって「子ども」の育ちを見取ることができるように、主語を「子ども」に変え、さらに「よわからない」との回答をなくしたのは良かった。アンケートの質問項目に「保護者が聞きたいこと」「子どもが学校が楽しいか」などの視点を加えよう。<br>○「先生が楽しんでいるか(働き方)」若手の先生をどのように育て、評価を共有しているか(若手育成)、次年度以降も考えていきたい視点である。<br>○教職員の退勤時刻が早まること、次年度に計画している新たな時程に期待し、様子を見ていくとともに、教職員の声を直に学校運営協議会委員が聞き取ることも教職員を支えることにつながることを考える。 |   | ○子ども自身が身近な問題に気づき、願いや考えをもって、自己変容することを年度初期に進めてく。<br>○「主体的、対話的で深い学び」の実現に向け、校内研究を中心にさらなる授業改善に取り組む。<br>○社会に開かれた教育課程の創出に向け、保護者や外部人材の活用が充実した継続的な関わりを検討していく。<br>○保護者との連携をともに、一人ひとりの児童の実態に合った学習指導、個に応じた児童支援、外部機関との連携を進めていく。<br>○育てたい資質・能力を身につけさせられるよう教育活動を吟味するとともに、校内研究を中心にさらに授業力向上をめざし、児童の豊かな将来の姿につながるよう全教職員で力を合わせて教育活動に取り組むたい。<br>○家庭学習で「何をどうすればよいかわからない」の3割を改善する課題の出し方も方を考え工夫する「なぜの宿題が必要か」を子どもが理解できるようにする。 |   |